

パスカル

愛によるまなざし

夭折の天才、パスカル



Blaise Pascal : 1623-1662

- フランスの物理学者、数学者、思想家。
- 12歳で三角形の内角の和が180度であることを自力で証明。
- 16歳で「パスカルの定理」を含む『円錐曲線試論』を発表。
- 20歳で機械式計算機の製作を完成。
- 39歳で死去

理性の限界

「それなら人間は、事物の原理をも究極をも知ることができないという永遠の絶望の中であって、ただ事物の外観を見る以外に、いったい何ができるのであろう。」

「これがわれわれの真の状態である。そのために、われわれは確実に知ること、全然無知であることもできないのである。われわれは、広漠たる中間に漕ぎいでているのであって、常に定めなく迷い、」 (72)

「無限の中であって、人間とは一体何なのであろう。」

人間の研究

「私は長い間、抽象的な諸学問の探究に従事してきた。そして、それらについて、通じ合うことが少ないために、私はこの研究に嫌気がさした。私が人間の研究を始めた時には、これらの抽象的な学問が人間には適していないこと、またそれに深入りした私のほうが、それを知らない他の人たちよりも、よけいに自分の境遇から迷い出していることを悟った。（略）人間を研究する人は、幾何学を研究する人よりももっと少ないのだった。人間を研究することを知らないからこそ、人々は他のことを求めているのである。だが、それもまた人間が知るべき学問ではなかったのだろうか。」（『パンセ』144）

人間の研究①

「人間は明らかに考えるためにつくられている。それが彼のすべての尊厳、彼のすべての価値である。そして彼のすべての義務は、正しく考えることである。ところで、考えの順序は、自分から、また自分の創造主と自分の目的から始めることである。

ところが、世間は何を考えているのだろうか。決してそういうことではない。そうではなく、踊ること、リュートを弾くこと、歌うこと、詩を作ること、（略）戦うこと、王になることを考えている。王であること、そして人間であることが何であるかは考えずに。」 (146)

人間の研究②

「われわれは自分自身のことを実にわずかしか知らないので、多くの人は、健康なのに、近く死にはしないかと考えている。また、多くの人は、死が近いのに、健康だと思っている。間近に迫っている熱や、まさにできかかっている腫れ物に気が付かないで。」
(175)

「私は、私がどこから来たのか知らないと同様に、どこへ行くのかも知らない。ただ私の知っていることは、この世を出た途端、虚無の中か、怒れる神の手中に未来永劫陥るということで、この二つの状態のうち、はたしてそのいずれを永遠に受けなければならぬのかということも知らないのである。これが私の現状である。弱さと不確実さに満ちている。」(194)

続・人間の研究②

「…そして以上すべてのことから私は、私の一生のすべての日々を、私に何が起こるはずなのかということを考えないで過ごすべきであると結論する。ことによると、私の疑いについて、何か光を見出すことができるかもしれない。しかし私はそのために骨を折りたくはない。またその光を求めるために一歩も踏み出したくはない。そして、あとは、こういう心配でもって自分で自分を悩ましている人たちを軽蔑であしらいながら、私は何の予測も何の恐れもなく、このような大事件をためしてみようと思う。そして、私の未来の永遠の状態について不確かなまま、ふんわりと死に身を委ねようと思うのである」

続・人間の研究②

「誰がいったい、こんな調子で論ずる男を友だちに持ちたいと思うだろうか。誰がいったい、よりもよって、こんな男を自分の問題を打ち明ける相手として選ぶだろうか。誰がいったい、苦しみの時に彼に助けを求めるだろうか。いったいぜんたい、こんな男には、実生活で何をさせたら良いのだろう。」

「…同じ心のなかに、同時に、最も小さなことに対するこの感受性と、最も大きなことに対するこの無感覚とを見るということは、奇怪なことである。」

人間の惨めさ

「われわれの惨めなことを慰めてくれるただ一つのは、気を紛らわすことである。しかしこれこそ、われわれの惨めさの最大のものである。なぜなら、われわれが自分自身について考えるのを妨げ、われわれを知らず知らずのうちに滅びに至らせるものは、まさにそれだからである。それがなかったら、われわれは倦怠に陥り、この倦怠から脱出するためにもっとしっかりした方法を求めるように促されたことであろう。ところが気を紛らわすことは、われわれを楽しませ、知らず知らずのうちに、われわれを死に至らせるのである。」 (171)

人間の偉大さ

「われわれは、真理を望む。しかし、われわれのうちには不確定しか見出さない。われわれは幸福を求める。しかし、惨めさと死しか見出さない。われわれは真理と幸福を望まないわけにいかない。しかし、確実さにも幸福にも達することができない。この欲求がわれわれに残されているのは、（略）われわれがどこから墮ちたかを感じさせるためである。」 (437)

「人間は、神にふさわしいものではない。しかし、ふさわしくなりえないものでもない。神が惨めな人間のなかに加わるのは、神にふさわしいことではない。しかし、人間をその惨めさから引き出すのは神にふさわしくないことではない。」 (510)

「受肉 incarnation」の概念

「悲惨は絶望を是認させる。高慢は自惚を是認させる。神の子が人となられたことは、人間が必要とした救いの偉大さによって、人間の悲惨の偉大さを人に示すものである。」 (526)

「自分の悲惨を知らずに神を知るとは、高慢を生み出す。神を知らずに自分の悲惨を知るとは、絶望を生み出す。イエス・キリストを知るとは中間をとらせる。なぜなら、彼においてわれわれは神とわれわれの悲惨とを見出すからである。」 (527)

「悪 mal」の必然性①

17世紀の状況：宗教戦争という矛盾
――内乱状態のフランス国内

「（略）兵士どもは、田畑の中で、既婚、未婚を問わず女たちに暴行を加え、哀れな農夫たちの馬を全部徴発した…（略）血に飢えた軍隊が田舎に侵入した時に必ず起こる、非常な荒らし方であった…三日前には、一士官が、哀れな一農夫と連れ立ってきたその妻と、彼らに手を引かれていた六歳の子供を、われと我が手にかけて殺した。その行為を冷静にやってのけたのだった。」

（フランソワ・ピション『フランス人の蛮行の歴史』1954）

「悪 mal」の必然性②

18歳からの病、世間からの孤立

「真理を支える柱だと頼んできたこの人たちが折れ曲がって、真理のために尽くすべき義務も果たそうとしないのを見て、私は驚いてしまったのです。この驚きには耐えられませんでした。苦しみのあまりに、倒れてしまわねばならなかったのです。」

(姉の回想録から)

「ひとり」になって①

「おかしいものだ。わたしたちは、自分たちと同じ人間の交わりの中でなら、のんびりと安気にしていられるのだから。かれらも、わたしたちと同じように悲惨な者であり、わたしたちと同じように無力な者なのに。かれらはわたしたちを助けてくれないだろう。死ぬときはひとりだ。だから、人は、自分がひとりであるように行動しなければならない。」(L151)

「ひとり」になって②

「イエスはただひとり地上におられる。地上には彼の苦痛を感じ、それを分け合う者がいないだけでなく、それを知る者もない。それを知っているのは、天と彼とのみである。」

「イエスはその苦難においては、人間が彼に加える苦しみを忍ばれる。だが、その最後の苦悶においては、自分で自分に与える苦しみを忍ばれる。それは人間の手から生じる苦痛ではない、全能の御手からくる苦痛である。」(553)

「彼は一度だけ祈られる。「この杯を過ぎ去らせてください」と。そして、なおも従順に、再び祈られる。「やむを得なければ、来らせてください」と。」

「イエスは、その友だちがみな眠り、その敵どもがみな目覚めているのを見て、その身を父に全くおゆだねになる。」

「イエスは、ユダのうちに敵意を見ず、かえって自分の愛する神の命令を見、それを言い表される。なぜなら、ユダを友とお呼びになったから。」

愛によって「知る」①

「キリスト者の神は、単に幾何学的真理や諸元素の秩序の創造者にすぎないような神ではない。それは異教徒とエピクロス派との見解である。また単に人間の生活と財産との上にその摂理を行い、拝する者に幸福な年月を恵むにとどまるような神でもない。それはユダヤ教徒の関心事である。それに反して（略）、キリスト者の神は、愛と慰めの神である。みずからとらえた人々の魂と心情とを満たす神である。彼らに自分の惨めさと神の無限の憐れみとを内的に感知させる神である。彼らの魂の奥底で彼らと結びつき、彼らに謙虚と喜びと信賴と愛とを満たし、」(556)

愛によって「知る」①

「神は、（略）『まったく神聖なやさしさ *une douceur toute céfeste*』をもって（略）初めて人々の心に光を注がれる」（「幾何学の精神について」『著作集』）

「人間は、神を知るに値しない者であるとともに、神を知り得る者であり、その墮落によっては値しないが、その最初の本性によっては知り得るからである。」(557)

愛によって「知る」②

「彼（人間）は、生まれながらにして愛し、知る力を持っているのではないか。彼は少なくとも、自分が存在することを、自分が何ものかを愛していることは確かなのだ。だから、今彼が置かれている闇のただ中においても、何ものかが見えるのならば、また地上の諸物の中にも、何か愛するものを見出しているならば、どうして神を知り、神を愛することができないわけがあるのか。神は、ご自身の本質を示すそこばくの光を、彼に与えておられるのである」 (L149)

愛の秩序①

「あらゆる物体、すなわち大空、星、大地、その王国などは、精神の最も小さいものにも及ばない。なぜなら、精神はそれらの全てと自身とを認識するが、物体は何も認識しないからである。」

「あらゆる物体の総和も、あらゆる精神の総和も、またそれら全ての業績も、愛の最も小さい動作にも及ばない。(略)あらゆる物体と精神から、人は真の愛の一動作も引き出すことはできない。それは不可能であり、他の超自然的な秩序に属するものである。」

「身体から精神への無限の距離は、精神から愛への無限大に無限な距離を表徴する。なぜなら、愛は超自然であるから。」
(793)

愛の秩序②

「心情には、それ自体の秩序がある。精神にはそれ自体の秩序があり、それは原理と証明によるが、心情にはそれとは別なものがある、人は愛の諸原因を秩序立てて説明することによって、愛されるべきであるということを証明しはしない。」

(283)

繊細の精神

「事柄を、推論の順序を追ってではなく、ただ一つのまなざしで一挙に見なければならない。」

↔ 幾何学の精神

「それらは、見えるというよりはむしろ感じられるものである。それらを自分で感じない人々に感じさせるには、際限のない苦勞がある。それらの事物はあまりにも微妙であり、多数なので、それらを感じ、その感じに従って正しく公平に判断するためには、極めて微妙で、極めてはっきりした感覚が必要である。その際には、たいていの場合、幾何学におけるように秩序だってそれらを証明することはできないのである。」(1)

パスカルの晩年

「聖書の唯一の目的は愛である」 (670)

1554年の「決定的回心」以降、「愛の秩序」を頭で知るだけでなくその実践に勤めていた

→現実主義者パスカル

1661年：

ポワトゥ地方の干拓事業に協力→農地の増加に成功

パリ市内にて公共交通機関「5ソルの馬車」営業開始

→貧しい農民や市民のために現実的なビジネスで収益を上げる